

身辺整理

寺尾敏子

生き生きと死ぬつもりです実むらさき 敏子

十一月の夜行句会の時の句。このあと、さあて生き生き死ぬには身辺をすつきりせねばと、休診の日曜祭日にせつせと片付けを開始。

一二月十日書類棚の整理。その棚から紙袋落下。中の二枚の紙に第26回現代俳句全国大会入賞作品が印刷してある。十五名のうち五名が九州。あれえー私の句も。26回って何時？

水中花どこに置いてても多忙なり

松本隆吉

羨美子忌や夜の洗濯機が廻る

土田晶子

祝辞にも似し弔辞き春の雨

清川嘉雄

あをあとと鬼灯があり泌尿器科

本田幸信

月見草ポルトガルより来て荷役

寺尾敏子

この私の句のとなりに同じ敏子が並んでいる。

花散つてそれから怠げものになる 富田敏子

並んだ敏子がうれしくて東京の敏子さんに葉書を出した事を思い出した。今も文通を続ける間柄。金子兜太師のお手伝いもするとの事。棚から落ちた俳句を読んでいる時、原稿依頼の加藤知子さんから電話。そして、「We」が二冊!!

俳句はいいなあとしみじみ思う日がつづく。棚から牡丹餅。身辺整理もいもんだ。(寺尾敏子さんは大正15年生まれ。現役の耳鼻科医をされています。一編集部より)

☆私の一句自句自解☆

右田捷明

大根掘る八郎絶えし古戦場

第53回滔天忌俳句大会の席題「大根」を見て畑か料理か食うか、しばらく考えていたら、昔二十年近く住んでいた八代にあった大根畑と球

磨川の堤防が浮かんできた。

そこで、西南戦争で戦死した宮崎八郎の故事をくづけて一句作れたが、ロカール俳句で八郎で誰だ、古戦場でどなたと言われかねない句である。

よくぞ五点も頂けた、と思いました。滔天忌俳句大会だけあつて、「八郎」を理解して頂いたことに感謝しております。

★創立七十周年記念 (十一月三日)

★第54回現代俳句全国大会参加句(県内)

ポッキーに持つところあり春愁

西村楊子

石鹸玉ひとり歩きのピエロかな

橋口風浪

大暑かな廁・厨に眼鏡置き

荒尾かのこ

軍艦もジェット機も買っ凍死多々

右田捷明

航跡のただ真つ直ぐな冬の朝

松尾光浩

回復棟菜の花いろに灯りけり

寺尾敏子

雲の峰うれし泣きしていいですか

真弓ぼたん

古希古希と集ふはなやか熱帯魚

加藤知子

★第11回九州地区現代俳句大会 三宮崎

参加者一句抄

(二月三日)

けむりにもなれず八月を持て余す

佐藤恵美子

熱帯夜句想未だ午前二時

右田捷明

秋蟬や吾が生涯に悔いすこし

光永忠夫

青蜜柑村を掃さざる猿がいる

中山宙虫

退屈に死にそうならば浮いてこい

真弓ぼたん

捨て猫の居るダンボール赤のまま

徳山直子

苦瓜を噛んで六腑の強き母

荒尾かのこ

冬林檎さくさくと噛む死神

桂 瑞枝

噴水秋へ償いきれぬもの数多

野田信章

桃を食ぶ国の与ふる銃を持ち

加藤知子

★第53回滔天忌俳句大会

(人賞)

十一月四日野田遊二選

晩年や前に後に月を連れ

福岡しよう

滔天の生髪や色を変へぬ松

荒尾かのこ

〈参加者一句抄〉

置き去りの影拾いゆく滔天忌

橋口風浪

蒼天の各地採る人もなき熟柿

桂 瑞枝

紆余曲折よもや八十滔天忌

右田捷明

濃い茶飲む大きな背中滔天忌

木下弘子

夕ぐれの芒の穂波乱を呼ぶ

徳山直子

★漱石忌法要俳句大会 十一月十日永田満徳選

(天会大賞)

十六年添ヒシ猫死ス漱石忌

荒尾かのこ

くまもと漱石倶楽部賞

加藤知子

良夜かな死にとうない往生す

加藤知子

〈佳作〉

湖晴れて遠阿蘇眠り着きにけり

宮中康雄

後を追えずにマフラー深く巻いている

中山宙虫

4点句 船浪を切るたび揺るる初曆

青島玄武

一切は空なり秋晴れの雲巖寺

橋口風浪

なだらかな肩描き仕事始めかな

若松節子

参加者一句抄

過去無くしベッドに友の居る寒さ

火の山を出でて十余里寒の水

光永忠夫

寒鯛や頭をこえ競り札投げ込まる

生田一代

あら雪と言ふて女は笑ひけり

真弓ぼたん

鶏頭の半枯れ美しき愚連隊

加藤知子

病床を貫き通す初日の出

丘 菜月

予期せざる友の便りや寒椿

徳山直子

従兄弟半その先知れず屠蘇交わす

右田捷明

老人の迷子放送三日哉

柏原喜久恵

醉なまこや込み合う姉妹理容室

川崎史朗

参加者の内、一名の方から不掲載にと連絡あり。

★大蔭禪寺かわしり句会

(平成30年1月27日)

〈開懷世利六英匠賞〉

冬天や菓匠の木形の黒ひかり

光永忠夫

三月 涅槃会を這い上がりゆく朝日かな

青島玄武

四月 父の手のおぼろおぼろとサクラチル

萩瑞枝

五月 葉桜の午後は石橋所在なげ

西口裕美子

六月 烏瓜リースまとは男花とふ

光永忠夫

七月 涼風のうしろに殺気轟轟洞

榮田しのぶ

八月 星台のこれより先は牛馬優先

田川ひろ子

★列島春秋掲載句(現代俳句各自号より転載)

三月 涅槃会を這い上がりゆく朝日かな 青島玄武

四月 父の手のおぼろおぼろとサクラチル 萩瑞枝

五月 葉桜の午後は石橋所在なげ 西口裕美子

六月 烏瓜リースまとは男花とふ 光永忠夫

七月 涼風のうしろに殺気轟轟洞 榮田しのぶ

八月 星台のこれより先は牛馬優先 田川ひろ子

九月 火焚巫女日焼顔してかしこまる

真弓ぼたん

十月 天高しからし蓮根の衣ぬぐ

林よしこ

十一月 田原坂に柿熟れ里人まるく老う

田上公代

十二月 文楽人形の首の音して清和風く

中山宙虫

一月 淑気満つ阿蘇の神話のぢじゃれたの

加藤知子

二月 破魔弓の形よく反る日高菜めし

榮田しのぶ

今後の日程

総会&現代俳句くまもと句会開催

日時：2018年3月10日(土曜日)。

場所：くまもと森都心プラザ会議室C

総会は13時から14時頃まで

＊総会用委任状を同封します。欠席の方は記名捺印後、3月5日必着でお願いいたします。(投句記載があれば青島さんに渡します)

句会は14時から17時まで

句会への会員・進会員の参加費は無料。

会員外は500円。

＊事前投句5句・欠席投句3句は3月8日まで

〒860・0072

熊本市西区花園一丁目15の3 青島玄武宛に

(096・353・4171)

【会員動向】

・加藤知子第2句集『樫の実の混沌より始む』

(2017年12月20日上梓)

原子炉のくがたちめげば花の冷え

・進会員継続

生田一代・柏原喜久恵

熊本県現代俳句協会会報第6号

2018年2月1日発行

発行人 熊本県現代俳句協会会長

光永忠夫

編集人 事務局長 加藤知子

光永忠夫

加藤知子